

シンポジウム

「相談支援充実のための論点」

話題提供②「知的障害者の地域移行支援を行ってきた内容の報告概要」

佐藤弘美氏（杉並障害者自立生活支援センターすだち）

（佐藤） 杉並の相談支援事業所支援センターすだちの相談員をしています佐藤と申します。どうぞよろしくお願いたします。

きょうは、相談支援の中で、特に知的に障害のある方の地域移行支援の経験を報告させていただきます。

簡単に私どもの相談の状況を申し上げますと、杉並区では、計画相談づくりが約2,600必要な中で、あと残りが、できてない部分が約900ぐらい残っていて、これは27年度に持ち越しながらつくっていくことになるかと思えます。その中で、私ども支援センターすだちとしましては、去年、25年4月から計画づくりを始めて、地域移行定着特定児童の指定をとらせていただきまして、130件、件数として見れば少ないかもしれませんが、130件を超える方の計画をつくってございます。

状況としては、毎月、このところは新規の作成が5件から7件、更新も5件から7件、モニタリングが15件から20件ぐらいというのが毎月です。相談件数としては、毎月450件ぐらいの、ご本人、ご家族支援策のやりとりをさせていただいています。私ども、そのほかに、杉並区から24時間の安心サポート事業というのを持ち帰って携帯に電話が来るというような、そういうものと、社会参加余暇事業を受けさせていただいております。

地域移行にかかわります、そのほかの活動としましては、杉並区の自立支援協議会に参加をしております、二つ部会があるのですけれども、相談支援部会と地域移行促進部会、どちらにも参加をしております。それから、自主的な必要になった地域のネットワークを、呼びかけて、その事務局も担うようにさせていただいております。

そういった状況でございますが、地域移行・地域定着にかかわる取り組みのほうに話を移させていただきます。

私どもの事業所で地域移行の取り組みをさせていただいていますルートは、二つあります。一つは、杉並区外のところからご連絡が、入所施設から連絡があつて、それで直接うちに連絡があつて社会資源を紹介させていただく。通所とそれから住むところ、

グループホームを紹介させていただいて、一緒に杉並に来られたご本人や支援者と見学をし、それから、その事業所のところをある程度絞れることになったら、空き情報とか、そうしたものを提供させていただいて、空いたとなれば、そこに次動く。こういう部分の一つ流れとして、ルートとしてございます。件数として、そんな多いわけではありませんけれども、その流れの一つあります。

それからもう一つの大きな流れは、私どもがおります支援センターすだちは、すだちの里すぎなみという、杉並区内にあります入所施設の中の一つのその係なのですけれども、すだちの里すぎなみ、50人の方が入所されておりますが、地域移行・地域定着、館の全員が地域移行する、それを3年をめどに地域移行するということを設置のときに利用されるであろうご本人やご家族、それから地域の方に約束をした施設として運営をしています。その運営をしている施設に入られた方々の地域移行というところを担っているわけでございます。お一人の特例もつからないという、全員が地域移行するところを、ちょっとでもボタンを外すと特例がどんどん広がることになってしまうということもありまして、最初からそういうふうにしないというふうにやっております。

入所をされている状態からの流れとしますと、入所を既にされている方とすれば、施設の方がすだちの里すぎなみが個別支援計画をつくって、持って支援をされています。その支援をされている中で、私ども支援センターすだちが地域のグループホームですとか、それから通所施設ですとか、あるいは余暇活動ですとか、医療情報とか、そうしたものをすだちの里のほうに提供させていただきます。特にグループホームの空き情報というのはとても重要でありまして、住むところの確保が一番見つからなければ次へ進めない状況でありますので、グループホームの空き情報を入所室の担当のほうにお伝えをします。そうしますと、入所のほうで、個別支援計画に基づいて、その方が、その何人かですね、対象となるのではないだろうか絞られて、ご家族に意向を、ご本人、ご家族に意向をお尋ねする。そのご本人、ご家族の意向が、ある程度、じゃあ見にいこうかしらというふうに、行かないという場合は別ですけれども、見にいこうかしらとなった場合に、そこから入っている方の意向が少しでも見られるところから動き始めるわけです。私どもも一緒に同行しまして、見ていただいて、それで、見ていただきながら見学をした後、どうでしょうかというところで聞きます。1カ所だけじゃなくて、グループホームの空きはほ

とんど少ないものですから、見に行くところは1カ所。そこが気に入らなければ、また次を待つと、こういう感じになります。

通所のところは比較的複数を一回に見ることも可能というところもあります。その間に、そのことが、声がかかるといいますか、空きがありますよという前に、すだちの里では計画的に何人かの方を地域の通所施設のところに体験実習を計画して、進められています。そこが進みまして、実際に実習でやってみて、行こうと、行きたいと、本人も行きたい、ご家族も賛成ということになりましたら、本格的な実習。それから、その時点からサービス等利用計画の作成、そしてケア会議の開催をして、入所施設との支援情報がグループホームや通所のところやヘルパーさんのところにつながるように、そういう会議を持って引っ越しをいたします。引っ越しをした、その日から、地域生活支援の、私ども相談支援の役割が定着支援としてつながっていくというような流れになってございます。

定着支援としては、当初3カ月間が毎月モニタリングをして、その次3カ月後、それからあと半年ごとという形で進めている。これはどこでも同じかと思えます。

そんな状況で、モニタリングのときは入所にいるときに、いるときのモニタリングとして私どもが気を使っているのは、どういう目的で、どういう事情ですだちに入られたのか。そこのところがわからないと、移行する先のご本人やご家族の気持ちがあかみにいわけなので、例えば家庭内暴力があつて来ることになったのかという場合もあれば、親御さんとご本人が話し合つて、高校卒業したから一回自立してみようと思つて入つてこられるのか、それぞれによって状況が違います。それからあるいは、例えば、東北、北海道の施設に行ったけども、一回すだちに入つて、それで今度はいよいよというふうになるのかという、それぞれ、いろいろな段階に応じた支援をする、聞く、お伺いするということが最初にあつて、それをもとに計画を考えていくようにしたいということで進めています。

それで、地域移行の実際の人数については、平成18年に開設されまして、26年10月の時点まで、ちょうど入所の定員50人と同じ50人の方が卒業をすることができました。最も多く卒業した後の卒業先は、住まいはグループホーム、ケアホームにありました。アパートの方が少ない。先ほどお話をされていて、少ないなというところが自分も気になったところがございます。それで、入所されて卒業された方、もともと在宅だった方が入つてこられた

という方が56%。他の入所施設系から来られた方が40%。そんな状況になっています。

それから、あと、卒業については、3年までで卒業できた方が30%、3年以上6年の方が42%、6年以上の方で卒業できた方が28%になっています。入所後8年経過しても、要するに平成18年に入所されても卒業できないでいる方が、たしか9人おられました。その9人の方については、その状況としては、重度の知的の方とか、精神と重複されている方、行動障害のある方、そのほかの特性の方というのが、要するに本人状況によって卒業できない方。それから、あと二つは、家族の受けとめで卒業できない方と市町村のほうで、出身もとの市町村が、なかなかオーケーにならないというのとなつています。

こうした取り組みを踏まえてする中で、地域移行をもっともっと進めていくということが必要だというふうに思っています。杉並区では、知的に障害がある方が杉並区以外でお住まいになっている方が約400人ございます。北は北海道から南は大分県ぐらゐまでの方がおられますけれども、そうした方々のことを考えたときに、もっともっとたくさんの方の地域移行を進めるために、今までやってきた中から感じたことが幾つかあります。

一つは、3年で地域移行をするんだということで入所をされるわけではありますが、なかなか、できれば入所しないで済みたいというご家族が多いんですけれども、そういうふうに思われる。ご本人からすれば、卒業をした後、ご自分の支援を続けてもらえるんだろうかという不安感がある。あるいは経済的にやっていけるんだろうか。そうでなくても、今、世の中ではだますみたいなことが多いから、余計だまされたりはしないだろうか。そういうところの不安感に十分応え切れているんだろうか。そういう不安感を払拭できない、あるいは、こういうふうにするから大丈夫だよということを伝え切れていないという部分で、卒業に対しての拒否感といいますか、二の足を踏むというところがあります。今まで、多分50人の卒業された方で、それを全くなしに、不安感なしに卒業された人は誰もいないんじゃないかというふうに、率直に言うと思います。私どもの説明や、それからこういうふうだから大丈夫だよと言える、その努力の不足を感じております。

それから、今行つていますサービス等利用計画についてもそうですし、住んでいると、体調変化だとか、いろんなことが起きる。そういつたことに、伝えたいことをちゃんと聞いてくれるだろうか。そういう対応をしてくれるのだろうか。何よりも、自分

はこうしたいのだけでも聞いてくれるだろうかというようなどころについての不自由なところが、多分ですけれども、一番不安感になっているのかなというところを一番感じています。

それから二つ目なのですが、ここは、ご本人にすれば、3年とか4年とか5年で卒業するんだということで入った。入ったときに、そこを卒業するときには、家とは違った、自分はこんなところに行きたいんだという思いを持っている方もあると思うのです。今までの部屋は8畳だった。それぐらいで、テレビもあってとか、いろいろ思うかもしれませんが。そうした選択肢を持って卒業できるか。申し上げますと、残念ながらグループホームに75%以上の方が行っておられますけれども、現実空きです。空きが出たという情報が最も重要で、空きが出て、事業所さんとなれば1カ月から2カ月の間に入ってもらいたいというふうに、大抵は思われますね。その間に決定をすると。今回、このグループホームが無理だったら、またしばらく。男性だけ、女性だけ、あるいは区分によって多い方少ない方という事業所さんの意向を考えると、空きというところが最も重要なチャンスでもありますし、1回しかないような選択の余地がない場合も出てくるというところが、とても苦しいものもあります。

それから、日中活動についてなんですけれども、日中活動については、杉並区内では通所を希望したときに行けないということはないのですけれども、ただし、通所先をご自分が、このプログラムをやりたい、この仕事をやりたい、こういう給料を得たいから、ここに来たいというようなことを選択できるかという、これまたそうはいかない。毎年毎年、今ごろ、ちょうど学校卒業者の進路を決める月ですけれども、とてもせつない思いをしながら決めている、それがそのまま卒業、この地域移行の卒業者のところにもはね返って行って、ご本人の障害特性ですごく必要な場合であっても、必ずしも、そうもいかないという現状もあり得ることがあります。

ここは二つ目です。

それから、続いての課題としては、ふだんの生活の中で卒業される方のニーズを見てもらいますと、グループホームやケアホームが多いとなりますと、特に土日の生活の余暇とか、社会参加のところが大事になっています。

現状としては、移動支援の事業所は200社ぐらい数年ぐらいで活動していたりするので、事業所の数としてはたくさんあるのですが、行き場所としてはどうなのだろうか、自分が行きたいカラオケ屋さんだけではなくて、映画館にも行きたいし、ご

本人によっては、障害のある人ばかりじゃない集まりのところも行きたい、そういう思いが皆さんにある。毎回同じところに行くのは嫌だよとかですね、当然そういう思いもありますし、それはグループホームの支援をされる方、ご家族、作業所、ヘルパーさん、みんなそうも思っているのだけでも、やっているところは、いっぱい点在をしながら、しかし、それを選ぶというツールができていないというところが現状であります。ヘルパー、事業者さんを紹介させていただくわけですけども、なかなかそこにつながったその支援というところに行っていない、その仕組みがつかれないというところに、とても4年、5年、何らかの働きかけをしようと思ってやっているのですが、行っていないのが一つあります。

それから、もう一つ大事なところは、先ほどの資料の5で、8年以上経過しても卒業していない方の数字をご紹介したのですが、特に思春期のいろいろな行動が出る、男性の場合なんかは特にありますけれども、それから高齢期の課題だとか、難しい支援を要する障害特性に応じた支援を受けとめる、そうした社会資源がまだ足りないというしかないのですかね。作り切れていない。中にはそれが無理なので、地方の入所を探しているという、片方で、地域移行しながら、入所のほうを応援しなくちゃいけないという矛盾したことをやっている自分たちがあります。

そのこのどうやって社会資源がふえていってもらえればいいのかというところであくせくする、あるいは悩んでしまうというところがございます。

こういったところを現状ではあるのですが、そんな愚痴ばかり言っても仕方ないわけなので、何も進まないということで、私どもとしては、やっぱり地域にある資源に直接ぶつかって、その資源のところを何とか力になれる、点から面にしたいというところで、幾つか資源の横つながりのネットワークをということで取り組みをさせていただいています。

これはグループホームを中心に生活を考えたところなのですが、入居者の皆さん、消費者としてのグループホームの利用者の皆さんの交流の場、まだまだ話し合いの場になかなか行かなくて、交流で終わっているところがありますけれども、毎年開催をすることができています。

それから、グループホームをふやすというところが何としても重要で、グループホームの立ち上げ支援プロジェクトというふうなところにつくって、それで、利用してもいいよという情報を入れて、つく

るための支援をさせていただく、そういうネットワーク。

それから、余暇社会参加にとって欠かせないヘルパーさんの集まりのネットワークがありまして、いつも夜7時ごろからのまるのですけども、集まって勉強会をやったりとか、それから、支援の方法を交流したりだとか、そうしたことの横のつながり、それから、グループホームで言うと世話人さんの横のつながり、一人で行って支援するという荷が重たいところを担っていただいている世話人さん同士のつながりをつくらうというところで、これもさせていただいています。

それと、今どうしてもうまくいっていないのが、栄養とか、看護とか、医療とか、そういうネットワークのところが自立支援協議会のほうで地域移行促進支部会だとか、そういったところで話し合いをもったり、アンケートをとったりとかしてはいるのですけども、なかなか形にならないという状況はありますが、何としてもこれは実現したいということで進めつつあるところです。

やっぱりこうした横のつながりを持つことで、ヘルパーさんで言えば、助け合ったり、知恵を出し合ったりする力、支援の力が協力し合うことで高まるというふうなことが、それはグループホームの世話人さんたちもそうでありますし、できています。なっています。

このサービスと利用計画のところが始まりまして、サービスと利用計画の会議のときに、当然世話人さんも作業所の方もヘルパーさんも何社もお見えになって話をする、そこで、立体的にご本人の支援の方向性を議論するというところが今までなかったところ、ご家族にとっても、ああそういうこちらの会社は思いでやっていたのか、でも本当はこうなのですよだとか、そういったことの話ができるようになりつつあります。

もうちょっとヘルパー、事業所さんのほうが進んでいまして、通所ですとか、それから、グループホームは個別支援計画がありますよね。でも、移動支援のところは、個別支援計画としてはつくらなくてもいいわけですね。サービスと利用計画は、ケア会議に来られると見られる。だけど、個別支援に、作業所ですとか、グループホームでどんな支援をしているかと、この支援計画はわからないとなると、ヘルパー事業者さんからすれば、サービスと利用計画を見て、それぞれの支援をいただくことになると、そのずれが出るのですね、ちょっと合わないのではないか。というところのような状況にあって、サービスと利用計画の役割がいよいよ何より深まってく

るんだな、そこができなければ、地域定着のほうに行かないんだなというふうを感じ始めているところでございます。

以上で終わります。ありがとうございました。